北欧のマンガ文化およびマンガ研究の概観
―フィンランドを中心に―

An Overview of Comics Cultures and Comics Studies in Finland and Other Nordic Countries

秦　　美香子

1. はじめに

マンガが読まれたり、マンガについて何かが語られたりする際の問題のひとつは、国境や言語圏であった。たとえば日本では、現在に至るまで、日本国内で発行されたマンガがきわめて多数の読者に受容されているのに対し、他言語圏で発行されたマンガが日本のマンガと同じように書店で平積みされることはほとんどない。また、先行研究が言語圏を横断して相互参照される機会も限定されていた。(1) 一例として、夏目房之介・竹内オサム編著（2009）『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房）を挙げる。本書は先行するマンガ研究の全体を概観するものであるが、ここで扱われる「マンガ」は日本のマンガに限定されており、参考文献としても「海外でのマンガ研究」章以外は日本語の文献のみが言及されている。「海外でのマンガ研究」という章がもうけられているということは、言語圏・国境を越えた研究交流の可能性が意識されていることには違いないが、そうした意識が特定の章に閉じ込められることで、逆に「国内の言説にのみ注目した日本のマンガ研究」と「国外の言説にも注目した（変わり種の）日本のマンガ研究」が区分けされてしまったように見えてしまうのは残念なことである。

こうした問題意識が共有されるようになった近年では、*Mechademia*（University of Minnesota Press）や『国際マンガ研究』（国際マンガ研究センター）といった定期刊行物の発行、あるいは国際学術会議の開催など、英語や日本語を使用した、国境を越えた研究交流が活性化しつつある。前者はこれまで英語圏の研究で参照されにくかった日本語の研究を積極的に翻訳している。また後者の『国際マンガ

研究』では、東・東南アジア、西ヨーロッパ、北米といった地域で行われている研究が多く参照されており、多様な地域の研究情報に日本語でアクセスできる貴重な場が形成されている。

本稿では、こうした研究交流をさらに活性化する一助となることを目的として、北欧とりわけフィンランドで発表された、マンガに関わる研究を概観する。北欧でのマンガ研究は近年活性化しており、2011 年には NNCORE（Nordic Network for Comic Research）がデンマーク、スウェーデン、フィンランドの研究者を中心に組織された。NNCORE は 2013 年に初の国際会議を開催しており、2015 年にも第 2 回会議が開催された。また NNCORE とは別に、英語で書かれた国際学術雑誌 *Scandinavian Journal of Comic Art*（SJoCA）も 2012 年以降発行されている（既刊 2 号）。なお SJoCA は学会などの機関誌ではなく、査読された論文を掲載するオープンアクセスのオンライン誌であり、NPO 法人 Scandinavian Journal of Comic Art によって運営されている。これらの会議や論文誌は、言語が異なるが文化的に共有できるものがある北欧地域内の協働と、研究成果を北欧から世界に向けて発信することを目指して実践されているものであるが、日本で行われているマンガ研究でこれらの成果が参照されることはほとんどない。また、とくに日本では、北欧地域のマンガ文化は他地域（アジア、西欧、北米など）に比べて注目されておらず、作品について言及されることもほとんどない。そこで本稿では、研究の相互参照を活性化するために、とくにフィンランドで発表された、マンガを対象とした研究・記事をまとめる。また、そうした研究を生み出した文化的環境を確認するために、研究の概観に先立って、北欧のメディア状況やマンガ文化の現状について述べる。

2. 方法

2015 年 8 月に Helsinki University および Aalto University 図書館にて確認できた資料のうち、英語で書かれたものを中心に、マンガに関して書かれた研究を概観する。上述した SJoCA など、先行研究にはオンラインでアクセスできるものも数多くあるが、当然ながら紙媒体でしか発表されていない研究も多い。また各大

学図書館はOPACを備えているものの、その原因は不明であるが、すべての先行研究が検索によってヒットするわけではない。本稿で扱う先行研究は、ウェブ検索、OPAC（Helsinki Universityおよび国立図書館の蔵書検索ができるHELKAおよびフィンランドの芸術系大学の蔵書検索ができるARSCA）での検索、Helsinki University Library（Kaisa-talo）およびAalto University Library（Arabia）での書棚の目視によって調査した論文および書籍である。それらの先行研究を、分析対象や方法によって分類した。ただし、本稿で紹介する先行研究は本文もしくは概要が英語で書かれたものに限られているので、本稿は先行研究を網羅するものではない。

ベルント（2010）は、日本のマンガがアメリカやヨーロッパのマンガからの影響なくして現在の様式になり得なかったことなどを例に、マンガのトランスカルチュラル（超域文化的）な経緯を確認した上で、しかし「研究を含むコミックスの言説は、その対象を国籍化してしまう傾向が顕著である」と指摘している。つまり、国境線に基づいてジャンルや表現スタイルを区別したうえで議論することが自明視されてしまっているということである。そうした問題をなるべく回避するために、本稿では「日本のマンガ」と「フィンランドのマンガ」、あるいはそれらと「スウェーデンのマンガ」などが、ただオリジナル版が刊行された地域が異なるだけで相互に異質なものであるとは見なさないように心がけた。

こうした問題は、「マンガ／コミック」をどう表記するかという問題にも深く関わる。本稿では、作品内の使用言語や作品の発表された地域にかかわらず、コマ割りによって分割された画面上に絵と言葉を組み合わせてレイアウトし物語を表現する印刷物を全て「マンガ」と書いている。マンガ研究の領域では、しばしば表記が問題となる。総称としては「コミック（ス）」、日本のマンガを指す場合には「マンガ」、というふうに語が使い分けられたり、日本のマンガを語る際に戦前の作品は「漫画」、戦後の作品は「マンガ」と区別して書いたりすることがある。人によっては「マンガ」と「まんが」という表記を異なる意味で使用することもある。コミック（ス）・バンドデシネ／BD・マンガ・漫画・マンファ・漫畫・カートゥーンなど、対象を区別したり議論を厳密に行ったりする目的で、現在のマン

ガ研究では様々な語が使用されている。これにならって本稿でも、日本のマンガを「漫画」、フィンランドのマンガをフィンランド語の sarjakuva を使って「サルヤクヴァ」などと表記することも出来るかもしれない。

しかしそうして語を使い分ける行為は、上述したベルント（2010）のいう「対象の国籍化」に他ならない。つまり、「マンガ／漫画」と「サルヤクヴァ」という別々の語を使用することは、両者の間に質的な違いを見出すという宣言になる。したがって、両者の間に違いを見出す目的がない場合には、こうした語の区別は、単に議論を混乱させたり、日本のマンガ市場やマンガをめぐる言説空間で無意図的に共有されがちな「海外の作品は日本の作品とは決定的に区別される存在である」という前提を再生産したりする機能しか果たさない。

総じて「マンガ／漫画」は日本の作品を指すことが多いために、「フィンランドで発表されたマンガ研究」などの表記は「フィンランドで発表された、マンガ表現を対象とした研究」としてではなく「フィンランドで発表された、日本のマンガに関する研究」の意で誤読されやすいかもしれない。しかし上記のような「対象の国籍化」を避けるため、本稿では、どの地域で発表された作品も「マンガ」と表記することにする（ただし、Comics Festival などの複合名詞の翻訳語としては「コミックスフェスティバル」といったカタカナ表記を使用している部分もある）。ここには、フィンランドのマンガだけが持つかもしれない固有の味わいといったものを無視してマンガ表現を画一的にとらえる意図はない。

なお、本稿では先行研究や表現を国境線で無意味に分断することはなるべく避けるものの、同時に本稿の目的は、日本のマンガ研究ではあまり参照されないフィンランドのマンガ研究を日本語で紹介することにある。その意味では本稿は、国境や言語圏によってマンガやそれを取り巻く言説が分断される状況の中に自らとどまるものでもある。

3. 北欧地域およびフィンランドのメディア状況とマンガ文化

先行研究の概観に先立ち、本節では、フィンランドのマンガ研究の現状をよりわかりやすく示すために、北欧地域およびフィンランドのメディア状況やマンガ

文化を簡単に確認する。なお本稿で「北欧」とはフィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド、及び、オーランド諸島、フェロー諸島、グリーンランドを広く指す。これらはNordic countriesと表記される際に含まれることの多い国･地域である。ただし主に言及するのはScandinavian countries（一般的に、ノルウェー、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、時にアイスランドが含まれる）である。

なお、本節を記述するにあたっても北欧およびフィンランドのマンガに関する先行研究を参照している。したがって、本節は北欧およびフィンランドのマンガ文化について整理するパートであると同時に、本節自体も先行研究の概観の一部に含まれる。

(1) 北欧地域のメディア状況とマンガ文化

デンマーク、フィンランド、アイスランド、スウェーデン、ノルウェーの出版

表1　各国の書店数および新聞数（書店・書籍は2014年、新聞は2013年のデータ）

	人口*1 （単位：万人）	書店数*1 （上段：実店舗） （下段：オンライン）	1店舗あたりの人口数*1	書籍の総売上高*1 （単位：百万€）	有料新聞数*2 （上段：日刊） （下段：その他）	新聞発行部数 （単位：千部）*3
デンマーク	562	342 17	15655	不明	33 1	799
スウェーデン	975	400 3	24375	699	74 90	1855
フィンランド	547	239 2	22697	504	46 137	1656
ノルウェー	518	569 13	8900	615	157 72	1632
アイスランド	33	28 3	10645	28	1 10	不明
日本	12700	13943*4 不明	9109	7909*5	130*6	46999

*1…Nordic Book Statistics Report 2014
*2…'Number of Newspapers 2013'（Nordicom 2014）
*3…日本新聞協会（2015）、2013年のデータ
*4…日本著者販促センター（2015）
*5…株式会社oricon ME（2015）、1兆281.3億円を1ユーロ＝130円として計算
*6…日本新聞協会に加盟している新聞社数のため実際には異なると思われる

協会が合同で発表した年次報告書およびNORDICOM（Nordic Information Centre for Media and Communication Research）の報告書によると、各国の書店および新聞の状況は表1のとおりである。書籍の総発行部数を下記全ての国に関して発見することができなかったため、参考として書店数および書籍の総売上高を示した。また参考として日本の数値をあわせて記載した。

Minna Tarkka（2003）は、メディア制作界・研究界・メディアを使った運動が領域横断的でハイブリッドなものになっていく世界的傾向の中での、北欧のメディア状況（主にデジタルアート関連のメディア文化状況）を概観している。Tarkkaによれば、ポピュラーメディアに関しては、北欧の各国・地域でコンピュータゲームに関する産業や研究が盛んである。またとくにフィンランドとノルウェーは、メディアアートやマルチメディアが国際的に名高い。その成功要因は、長年にわたる国際的ネットワーキングと、セミナーや出版物を介した批評の発展にあるようだ。こうしたことを行ってきたのはスウェーデンやデンマークも同様であるものの、フィンランドやノルウェーでは、旧来の「芸術」観にとらわれず、文化とビジネスを結びつけるような試みにもより積極的であったとされている。一方、メディアを使った社会運動やコミュニティのためのメディアは、北欧のいずれの国・地域でも、あまり活性化されてこなかったようである。メディアアートの領域に見られる傾向は、後に見るように、マンガを取り巻く状況とも比較的近い。ただし、たとえばフィンランドではマンガ表現を使った草の根運動が行われていた事例もあり、まったく共通しているというわけでもない。

北欧全体のマンガ文化について一望することは難しいものの、フィンランドマンガ協会（the Finnish Comics Society、1971年設立）によって運営されているNordicomicsというプロジェクトが参考になる。これは2009年にヘルシンキで行われた同名のエキシビションとワークショップを端緒としたプロジェクト型組織で、作品を国内外でプロモーションしたり国家を横断してアーティストが協働したりすることを目的としている。これまでフィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、エストニア、ラトビア、リトアニアで活動が行われてきた。

その公式サイト（http://nordicomics.info/）では、上記の国にアイスランド、グリーンランド、オランダ、ドイツ、ポーランド、ロシア、イギリス、ベルギーを加えた15か国のアーティスト63名（2015年10月23日現在）の略歴、作品画像、連絡先が紹介されている。北欧地域に居住するかどうかにかかわらず、Nordicomicsの活動に関わったアーティストを広く紹介しているようである。また、フィンランド、スウェーデン、ノルウェーのマンガ図書館およびマンガのコレクションがある図書館のリスト、各国のコミックスフェスティバルの紹介、各国のマンガ文化の状況に関する記事などがある。サイトの使用言語は英語であるが、これは国ごとに言語が異なるためと、国際的にアーティストや作品をプロモーションするというサイトの目的のためであると考えられる。

Nordicomicsと同様の活動を行っている組織には、2011年に活動を開始したCUNE（Comics Union of Northern Europe）がある。これは、各国のアーティストが互いの国に滞在して創作活動を行うComics-in-Residence プログラムが主たる活動内容である。

Nordicomicsのサイトに書かれた情報の全てを本稿で要約することは避けるが、スウェーデン、ノルウェー、デンマークのマンガ文化状況を簡単に紹介しておきたい。フィンランドについては後述する。

スウェーデンのマンガ出版は現在も盛んで、とくに女性作家の国際的活躍が目立つが、Kristiina Kolehmainen（2015）によれば歴史的にも古くからマンガ出版が行われていたようである。ロドルフ・テプフェールに影響を受けたFritz von Dardelは1844年に*Minnen från Stockholm*（Memories from Stockholm）を出版している。20世紀初頭から、週刊雑誌にはマンガのページがもうけられることが多く人気も高かったようだ。1950年代にアメリカでマンガ撲滅運動が起こった際には、スウェーデンでも連動して同様の運動が起こり、また1960年代のアメリカのアンダーグラウンド・コミック運動も伝わり、多くの作家がロバート・クラムに影響を受けたとされる。1968年にはSeriefrämjandetというマンガ協会が設立されたが、これはヨーロッパの中でもかなり古い例であるようだ。

ノルウェーは1990年代後半以降、アメリカやスウェーデンに影響を受けてマン

ガ出版が活発に行われるようになってきた。その後、読者数は伸びており、他メディアで取り上げられることも増えたようである。グラフィック・ノベル（主に大人向けの、自伝的な内容や深い心理描写などが描かれることの多いジャンルで、世界各国で出版されている）や一般的なマンガは出版社の規模に関わらず一定程度は出版されている。新聞漫画も多くつくられている（Nordicomics 2015）。

Mads Bluhm（2015）によれば、デンマークのマンガ文化はあまり活性化されていないようである。本稿冒頭で述べたマンガ研究の国際的組織 NNCORE はデンマークの研究者が中心となって設立されたものであるが、デンマーク内部にはマンガ関連の組織はほとんどなく、アーティストを支援する制度なども存在しないとされる。デンマーク語使用者が少ないためアーティストはマンガを専業とすることが難しく（デンマークの人口は約 560 万人）、マンガは大半が翻訳された外国の作品であるようだ。かつてはキオスクやスーパーマーケットでマンガが売られていたが、近年ではそれもなくなり、また日本のマンガ作品のブームも終了したとされている。

以下ではフィンランドのマンガ文化について述べるが、フィンランドは上記 3 か国の中ではノルウェーの状況に近い。上述のとおり、フィンランドとノルウェーはデジタルアート領域でも類似性が指摘されていた。これは憶測であるが、地理的にスウェーデンに隣接しており、スウェーデンからの影響を受けながら独自性を模索してきたという条件が共通していたのかもしれない。

(2) フィンランドのマンガ文化

本項ではフィンランドのマンガ出版状況およびマンガ文化を簡単に紹介する。

1990 年代ヨーロッパのマンガ文化を広く考察した Beaty（2008）によれば、フィンランドのマンガは、フィンランド語が言語的にマイノリティであるにもかかわらず、国際的に高く評価されるアーティストを輩出してきた。フィンランド語使用者が限られているので、フィンランドのアーティストは国外のアーティストと協働しようという意識が高い。また、映画の字幕のようなスタイルでコマの下部やページ下部に英語の翻訳を付ける例が多い。それは逆に、地元向けの作品、翻

訳されない作品が評価の対象になりにくいことを示してもいる。またフィンランドではマンガ界が狭いため、同じアーティストがいろいろな雑誌に重複して描いている例が多く、閉鎖的で多様性に欠けるように見えてしまう（Beaty 2008: 130-132）。2000 年代以降も状況はあまり変わっていないため、以上の Beaty による要約によって全体像はおぼろげに把握できるといえるかもしれないが、簡単な歴史的経緯とより詳細な現状を確認しておきたい。

フィンランドの主な出版社には WSOY（Werner Söderström Osakeyhtiö、1878 年設立、現在はグローバル企業の Bonnier Books グループ傘下）、Sanoma Corporation（Sanoma Osakeyhtiö 、1889 年設立）、Otava（1890 年設立）、Tammi（1943 年設立）などがある（初期のフィンランド出版史については Hakapaa 2002 に詳しい）。マンガは上記いずれもの出版社からも発行されている。また、これら大手の出版社だけでなく、中小規模の出版社も存在し、また自費出版も行われている。Mousse（2015）によれば、フィンランドは人口密度が低いために輸送コストがかかり、また税率が高いために本の価格が高くなってしまう。そのため出版産業は規模が大きくないものの、フィンランド人は読書熱心な層が他国に比べても大きいため、産業は安定しているということである。

書籍形態で初めて刊行されたフィンランドのマンガは、1911 年に WSOY より出版された、Ilmari Vainio による *Professori Itikaisen tutkimusretki*（「Itikaisen 教授の冒険」、2011 年他に復刊されている）であるとされている。また最初の新聞漫画は 1927 年に Akseli Halonen によって描かれた *Herra Pulliainen*（「Pulliainen 氏」）であった。同時期に発表された Ola Fogelberg による *Pekka Puupää*（1925 年他）も後年に渡って非常に人気が高いシリーズであり、現在もこの名を冠したマンガ賞（Puupää-huopahattu）が毎年アーティストに贈られている。

ただし、これらは個別の事例としては注目されるものの、フィンランドのマンガがジャンルとして確立されるようになったのは、1950 年代以降（*The Helsinki Times,* 2013 年 9 月 5 日）、あるいは 1960 年代以降（Hänninen 2011）のことであるといわれる。1950 年代後半はトーベ・ヤンソンがムーミンシリーズを新聞漫画化して国際的に評価された時期であり、また 1990 年代以降フィンランドを代表す

るマンガ・イラスト作品のひとつといわれるようになった *Tom of Finland*（Touko Laaksonen 作）が発表され始めた時期でもある。1960 年代末以降は子ども向けマンガに限らず、ポップアートやサブカルチャーの領域にもつながるマンガ作品が Timo Aarniala や Kalervo Palsa といった作家によって描かれるようになった時代であった（Hänninen 2015）。

近年では、フィンランド国内で発行されたマンガの新刊数は年間約 300 タイトルであり、出版市場に占める割合は 7％程度である（Statistics Finland 2014）。国内で最も発行部数の多いマンガは、単体で販売されているものでは ‘Aku Ankka’（ドナルド・ダック）シリーズである。このシリーズは 1951 年から発行され続けているが、2014 年時点でも平均発行部数 835,000 部とされている（KMT 2014）。この人気は、22 万世帯を超す定期購読者に支えられているようである（Media Audit Finland 2014）。アメリカ本国も含めた他のいずれの国よりもフィンランドで熱心に読まれ続けているために、1999 年には *The Quest for Kalevala* というカレワラ物語をもとにしたエピソードが、とくにフィンランドの読者に向けてつくられた。

また、近年の新聞連載作品では、Helsingin Sanomat 紙に掲載の ‘Fingerpori’（Pertti Jarla 作）や ‘Viivi ja Wagner’（Juba Tuomola 作）が最も代表的といえる作品である。‘Fingerpori’ については、単行本が 2014 年時点で既刊 7 巻の合計で 50 万部近くを売り上げた（Kataisto 2014）。‘Aku Ankka’ が家族向けの内容であるのに対して、‘Viivi ja Wagner’ や ‘Fingerpori’ は大人向けといっていい。とくに ‘Fingerpori’ は、言葉遊びで笑わせるのがパターンであるが、性的な言葉や差別的ともいえる言葉、あるいは警察など権威的存在を強烈にからかう内容が多い。

日本のマンガはこれらの作品の知名度には到底及ばないものの、2013 年に Sangatsu Manga（出版社 Tammi 内のマンガ出版のレーベル名）の Antti Valkama 氏に尋ねたところでは、当時で『ドラゴンボール』既刊 42 巻の合計発行部数が 50 万部近くということであった。

‘Fingerpori’ など一部の人気作を除いては、フィンランドの地元アーティストによってつくられるマンガは、グラフィック・ノベルに分類されるような作品が多く、どちらかというと一般向けというよりも新しいアートを好む層に受容されている

ように思われる。北欧の中でも最大級といわれるコミックスフェスティバルであるHelsinki Comic Festival（1986年開始、毎年8月末から9月上旬に開催される）でも、書店が集まってマンガを販売するメイン会場で人気が高いのは‘Aku Ankka’シリーズやアメリカなど他国から輸入されたマンガや家族向けのマンガであり、フィンランドでつくられたグラフィック・ノベル作品が多く販売されている様子は見受けられない。といっても、Helsinki Comic Festivalではメイン会場以外にヘルシンキ市内の複数個所のギャラリーでフェスティバルに関連してマンガの原画やイラストレーションの展示が行われており、新しいアーティストにとってこのフェスティバルは、本を売るだけでなくギャラリーで作品を展示して認知度を高める場にもなっている。

新聞連載漫画とは異なる形式で描かれるグラフィック・ノベル作品の例を本稿で丁寧に紹介することは、紙幅の都合上とても出来ないので、ごく数例のみを簡単に紹介しておきたい。たとえばTommi Musturiによる*Samuelin Matkassa*（2009年）は、言葉のないマンガで、一見絵本のような装幀である。奇妙な風体（裸で真っ白で、目がひとつしかない、おそらく男性）の主人公が、古代のような未来のような奇妙な惑星（あるいは地球）で過ごす様子が描かれている。はっきりとしたあらすじはないが、自分自身を殺して心臓を取り出し、その切り口から自分自身の身体の中に入っていくような描写があったり、何か他のものと対話をしたと思えばひとりぼっちになったりと、物語のような体裁で内面的な世界を描いているように見える内容である。また、ここまで難解な内容ではなくても、女性とちいさなお化けを描いた大人向け絵本のような*Kummituslapsi*（The Ghost Child）、作者自身をネズミ、作者の夫をアヒルのキャラクターにして自伝的な物語を描くKaisa Lekaによる一連の作品など、内的世界や自伝的エピソードを描くものが比較的多いように見受けられる。*Kummituslapsi*は1ページ1コマで、コマの下にキャプションとして説明が付けられたり短いセリフの吹き出しがあったりするコマが時々ある以外は言葉のない作品である。セリフやキャプションはフィンランド語で書かれているが、英語訳もページ下に付けられており、フィンランド語話者以外の読者にも読まれるよう工夫がされている。Kaisa Lekaによる作品は、シンプ

ルにデフォルメされたマンガ的キャラクターが描かれるスタイルで、日本でいうエッセイコミックに非常に近い。Hänninen（2011）は、これらのフィンランドマンガのキーワードは「異化（alienation）」であると述べている。

それらの新しいマンガは、Helsinki Comic Festival 以外では、フィンランドマンガ協会（Finnish Comic Society）によるイベントやワークショップ、オンラインでの情報発信などを通じても、国内外に向けてアピールされている。とくに協会では 2011 年以降、*Finnish Comics* という年鑑を英語・フランス語・ドイツ語で発行しており（年によって使用言語が異なる）、国外の認知度を高めることに熱心である様子がうかがえる。また FILI（Finnish Literature Exchange）も、フィンランドのアーティストのカタログを英語で作成しオンラインで配付している。こうした試みが行われているのは、上述したデンマークの状況と同様で、フィンランドも人口が少なくフィンランド語使用者の数が限られているために、フィンランド国内で受容されるだけでは専業のアーティストを輩出することがほとんど期待できないためだろう。Hänninen（2011）によれば、フィンランドにはマンガ産業と呼べるような規模のものはなく、専業でやっていけるアーティストもほとんどいない。

フィンランドマンガ協会によるイベント以外でも、Kiasma（フィンランド国立美術館のうち、現代芸術専門の美術館）によってマンガ関連の企画展が行われることがある。ヨーロッパの国ではしばしば見られることであるが、フィンランドでも、マンガは基本的に芸術の範疇で理解されており、新しい芸術の一形態として認知度を高める努力がなされているように思われる。

4. フィンランドで発表されたマンガ文化に関する英語論文・記事

近年のフィンランドでは、研究書や学術論文としてはマンガに関するものはあまり発表されていない半面、学位論文の分析対象としてマンガが取り上げられることが比較的多いようである[(2)]。一例を挙げると、英語学の論文である Pörsti（2014）は、Garth Ennis と Steve Dillon による *Preacher* シリーズのジェンダー表象を分析している。英語に発信される研究成果に限定すれば学位論文が特別多いという

ことはないものの、本稿でも、‘Aku Ankka’シリーズを取り上げたいくつかの研究を参照している。また学位論文以外では、マンガを扱った研究は、メディア研究や人類学の領域で発表されていた。本節では、特定の作品や作家に注目した研究と社会学的アプローチによる研究に分けて先行研究を概観する。また、とくに研究の多かった‘Aku Ankka’シリーズに関しては別に項を設けた。

本節で参照する研究は、いずれも英語で本文ないし詳細な内容紹介が書かれたものに限定されている。フィンランド語で書かれた先行研究については稿を改めて概観したい。

(1)‘Aku Ankka’シリーズに関する研究

‘Aku Ankka’シリーズを主たる対象とした研究のひとつに、研究同人誌 *Ankkalinnan Pamaus*（*The National Donaldistic Magazine*）がある。‘Aku Ankka’シリーズおよびその他ディズニーコミックについて研究する *Ankkalinnan Pamaus* は、1998 年に創刊され、10 巻（35 号）まで発行されている。記事はフィンランド語で書かれており、作品研究だけでなくアーティストや関係者のインタビューも数多く掲載されている。2010 年には英語版の特別号が発行され、オンラインでダウンロード可能である（http://issuu.com/timoro/docs/nationaldonaldistic1b）。

その他英語で発表された研究には、フィンランド語版の出版というメディア的側面、英語からフィンランド語への翻訳という言語的側面、作品の受容に注目したものがあった。

【メディア的側面に注目した研究】

ディズニーコミックのフィンランド内での出版に着目したものには、Eskelinen（2008）、Ronkainen（2010a,b）があった。いずれも‘Aku Ankka’がフィンランドで刊行され始めた際の経緯をまとめている。まず、アメリカでディズニーコミックが初めて刊行されたのは 1930 年 1 月のことであったが、早くも同年 3 月にはタンペレの *Aamulehti* 紙がミッキーマウスの掲載を始めた。またドナルド・ダックのマンガが初めてフィンランドで発表されたのは、1937 年に Sanoma Osakeyhtiö

社発行の *Seura* という家族向け雑誌においてであった（Eskelinen 2008）。なお、これは雑誌や新聞に作品が掲載されるということではなく、ドナルド・ダックやその他のディズニーコミックを収録した、簡単な製本の形態で発行されたという意味である。体裁は中綴じの雑誌であるが、その位置付けは日本の単行本とマンガ雑誌の中間といったところである。そして同じ1937年には、Suomen Gummiteollisuus Oy（後年のNOKIA）がディズニーキャラクターを人形などに商品化し、販売を始めた（Ronkainen 2010a）。1937年時にはAnkka Lampinenと翻訳されていたドナルド・ダックの名がAku Ankkaとなったのは、1951年にHelsingin Sanomat社が版権を得た時のことであり、その後はAku Ankkaという名で定着することになった（Ronkainen 2010a）。'Aku Ankka' シリーズは、シリーズ刊行当初は月刊、1956年からは隔週刊、1961年からは週刊で刊行されるようになった。その多くは定期購読で、ごく一部は書店やキオスクなどでも販売された（Ronkainen 2010b）。また1950年代を通して、*Helsingin Sanomat* 紙で週1回、広告として作品が掲載されていた（Eskelinen 2008）。

Ronkainen（2010a,b）では現在に至るまでの（二次的創作物も含めた）シリーズ刊行の変遷や、制作に関与したフィンランド人のエピソードを詳細にまとめている。その全体を要約することは本稿では避けるが、こうした詳細な研究が行われている点からも、'Aku Ankka' シリーズがフィンランド内で刊行されているマンガ作品の代表的・特徴的存在であることが窺い知れる。

【言語的側面に注目した研究】

Eskelinen（2008）によれば、'Aku Ankka' シリーズのフィンランド語版は主にデンマーク語版からつくられた。シリーズが最初に翻訳された時から現在に至るまで、標準的なフィンランド語で言葉の用法などに注意を払いながら翻訳されているために、大人の読者も楽しめ、子どもの読者にも理解されやすい言葉が使われている。その工夫が、シリーズ刊行当初からこのシリーズが大人の読者の鑑賞にも耐えるものだと認識されたことにつながるとされている。またシリーズが刊行され始めた1951年は、ソ連との継続戦争（1941～1944年）からそれほど時間が

経っておらず、経済的にも文化的にもアメリカ化が起こっていた時期であったために、アメリカのマンガが受け容れられやすかったという事情もあったようだ。とはいえ、作品の中でアメリカ文化や資本主義的価値観が強調されることはなく、アメリカを感じさせるものはポストの形態など町の風景に限られる（Eskelinen 2008）。

Filppu（2012）およびKoponen（2004）は、‘Aku Ankka’シリーズの英語オリジナル版とフィンランド語翻訳版を比較している。マンガがフィンランド語に翻訳される際には、フィンランド語の単語が長い（文字数が多い）ためセリフをフキダシの中におさめるのに翻訳家は苦労する（Filppu 2012: 19）。しかし問題になるのは単語の長さだけでなく、おもしろい意味が込められたキャラクターの名前をフィンランド語でどのように表現するか、セリフ中の単語をどう訳するか・意味が通じるようにどのような言葉が追加されるか、オノマトペをどのように描き変えるか、といったさまざまな側面がある。Filppu（2012）は、意味が非言語的な要素と言語的な要素の組み合わせによって生成するという点にとくに注意しながら、これらの事例について丁寧に分析している。またKoponen（2004）は、言葉遊びに焦点を絞って英語のオリジナル版とフィンランド語の翻訳版（活字部分のみ）を比較している。

【受容に注目した研究】

先述したEskelinen（2008）では、大学生を対象にした質問紙調査（‘Aku Ankka’シリーズを子ども向け／大人向けのいずれと思うか、大学生になった今でも作品を読んでいるか、などを尋ねたもの）の結果も示されていた。調査によって明らかになったことは、‘Aku Ankka’シリーズがフィンランドの読者には決して単なる子ども向けのマンガと見なされているわけではないこと、また実際に他のマンガよりも大人の読者に多く読まれていることなどであった。

また、Lehtinen（2008）は健康教育の視点から‘Aku Ankka’シリーズの中で言及された健康に関する情報が正確であるか、読者にどのように理解されているかなどが検証された学位論文である。本論文はフィンランド語で書かれたものであ

るが、英語の要約が添えられている。

(2) 作品・作家に関する研究

本項では、前項で述べた‘Aku Ankka’シリーズ以外の、作品・作家に焦点を置いた研究について述べる。

‘Aku Ankka’とともにフィンランドで非常に好まれている古典的キャラクターにムーミンシリーズがある。ムーミンシリーズはスウェーデン語系フィンランド人のトーベ･ヤンソンによってつくられた。小説（児童文学）が最も知られているが、マンガなどの形態でも発行されている。ムーミンシリーズは、日本でも数多くの研究が発表されており、また世界中で研究が行われているといっても過言ではない。それを本稿で網羅することは到底出来ないが、とくにフィンランドの媒体で発表された、マンガにも関わる論考のうち、英語で書かれたものを紹介しておきたい。

Holländer（1983）はトーベ・ヤンソンのムーミンキャラクターを描くスタイルを分析したものである。物語内容とイラストの描かれ方の関係が関心の対象とされており、どんな道具で、どんなスタイルでキャラクターが描かれているかが、とくにシリーズ内での描線の変化に焦点を置いて分析されている。本文はスウェーデン語で書かれているものの、巻末に英語で内容をまとめた記事（8ページ）が掲載されている。

一方、Mitsui（2012）は日本でのムーミンキャラクターの受容について、ノスタルジアとユートピアいうキーワードから考察したものである。この論文は、ムーミンの絵が付与されたキャラクター商品や広告表現を主に考察の対象としており、マンガを対象とした研究ではないものの、マンガ研究に類する先行研究として紹介しておきたい。Mitsui（2012）によれば、日本でムーミンはしばしば「なつかしさ」を感じさせるものとして語られるが、それは個人的な記憶ではなく集合的記憶である。またムーミンは自然との調和、資本主義の超越の象徴とみなされることもある。ムーミンはさまざまな企業が広告キャラクターとして採用している。消費者は、自然と調和した、あまり物質主義的でないライフスタイルを象徴する

ムーミンの絵のついた商品を購入することで、消費行動を何となく倫理的で贖罪的なものとして位置付けることができるとMitsuiは考察している。またこのようなムーミンのイメージは、フィンランド社会に対する安定や健全というイメージと結びつき、日本のあるべき未来像として位置付けられることもあると述べている（Mitsui 2012）。なおこの論文は、問題意識の所在は後述する社会学的アプローチによる研究に含まれるが、分析対象がムーミンシリーズという特定作品であるため本項で参照した。

作家に関しては、学術論文が書かれているというよりも、上述の通り協会などによってフィンランドのコミックアーティストを紹介する冊子や書籍が発行されている例が多い。ウェブサイトで閲覧できる記事には、Finnish Comics Society公式サイト（http://www.sarjakuvaseura.fi/fi/）、Finnish Comics SocietyとFILI（Finnish Literature Exchange）による、フィンランドのマンガを紹介するサイトのFinnish Comics Info（http://finnishcomics.info/）、オンラインジャーナル*Books from Finland*のマンガ関連記事（http://www.booksfromfinland.fi/tags/tag-comics/）、フィンランド政府観光局のサイト‘this is FINLAND: things you should and shouldn’t know’内にある、芸術文化を紹介する記事（漫画的な表現を行うアーティスト10名を紹介した記事‘The core of the comic craze: Top 10’など、http://finland.fi）、FILIサイト内でダウンロード可能な、フィンランドのマンガを紹介するPDF冊子（http://www.finlit.fi/fili/hallinta/wp-content/uploads/2012/09/finnish-comics-www.pdf）、北欧のマンガ全般を紹介するサイトのNordicomics（http://nordicomics.info/）、などがある。書籍では、英語で書かれたものではPasonen（1997）、Kiasma（現代美術館）のマンガ関連の特別展についてのカタログ（Kiasma 1999）、マンガと近代技術というテーマで21名のアーティストが描いた作品をまとめ、作者の略歴や連絡先を紹介したカタログ（Arktinen Banaani and Sarjakuvantekijät Ry 2001）などが、1990年代に活躍した作家の略歴や作品の一部を紹介している。2000年代のものとしては、上述した年鑑（*Finnish Comics Annual*）が2011年以降発行されている（2011年版および2012年版は英語、2013年版はフランス語、

2014 年版はドイツ語で書かれており、2015 年版はスペイン語で出版される予定である）。

特定の作品や作家に焦点を置いた研究以外で作品に注目する例には、ナラトロジー・比較文学的アプローチによる研究などが発表されている。これらの理論的な研究は、とくに英語で書かれた場合には、Mikkonen（2012）などのようにフィンランド国外の学術雑誌で発表されることが多いかもしれない。今回の調査では、参照できたのは Kukkonen（2008）のみであった。

Kukkonen（2008）はジャンルの慣習など読者共同体の中で共有される、読みにまつわる知識（文化的記憶）の理論的検討を行い、それを事例によって確認するものである。言及される事例はおとぎ話のキャラクターである。おとぎ話は、ポーズや図像的主題に関して、先行するテクストで使用されたものが繰り返し使用され、読者に見慣れた感覚をもたらす。しかしおとぎ話は、主に文字で構成されているために、キャラクターの視覚的特徴をはっきりさせる必要が必ずしもないのに対して、それがディズニーや *Fables*（DC コミックスのシリーズ）において表現される際には、キャラクターの容姿が特定されることになる。そして有名なおとぎ話のキャラクターは、別々の物語の主人公であっても、明確に見分けがつくように容姿が差異化される。ディズニーのアニメーション作品では、たとえばシンデレラと白雪姫は全く違う容姿をしている。*Fables* でもまずディズニーのパターンが踏襲され、その上で変化が加えられる。おとぎ話をめぐるポピュラー文化的記憶が再生産された上で、それが改変されるのである。いくつかの例によって確認されているのは、読書におけるテクストとコンテクストの相互作用、読みの社会的側面と心理的側面の結びつきである。ただし、オーディエンス、テクスト、ポピュラー文化的記憶にある定番（conventions）の結びつきは、可能性を提供するものであっても、読者の読みを固定するようなものではないと Kukkonen は述べている（Kukkonen 2008: 271）。

(3) 社会学的アプローチによる研究

次に、社会とマンガの関わりに焦点を置いた研究や書籍を見てみたい。

Kauranen（2008）は、1950年代のフィンランドで起こった、マンガの主題やマンガを子どもが読むことをめぐって起こった議論について考察している。Kauranen（2008）自体はスウェーデン語で書かれているが、巻末に11ページにわたる要約が英語で書かれている。1950年代はアメリカを始め西洋世界の各地でマンガを問題視する議論がわき起こった時期であるが、フィンランドでも他国と同様に論争が起こった。ただしそれに対する研究は他国とは異なり活発でなく、Kauranenによる本書が初めての試みだったようだ。1950年代の論争では、マンガは形式と内容の両面から批判された。形式的には絵が中心のメディアであり文字が質量共に「本物」の本より劣っているとされ、だからこそ内容的にも暴力的であったり商業的であったりと問題である、とみなされた。また子どもの発達に悪い影響を及ぼすとされた。これは他国にも同様に見られる議論だろう。ただしKauranenはここで、マンガの何が批判されたかだけでなく、それによって何が起こったかに注目する。そして、この論争によりマンガを科学的、学術的に研究する必要性が語られるようになったこと、また、外国から来た「悪い」マンガにかわって国産の「良い」マンガが求められるなど、メディアが良いメディア／悪いメディアに分類されたことを明らかにしている。マンガが暴力的で粗悪な、子どもの発達に悪い影響を及ぼすかもしれないメディアとして注目され、議論がわき起こったからこそ、マンガというメディア自体が注目に値すべきものとして位置付けられ、またマンガが実際に何らかの影響を子どもに及ぼすのかどうかを客観的に検証しようという方向に議論が発展した。その結果、フィンランドではイギリスやアメリカで見られたような出版規制・業界による自主規制という事態が起こらなかったという。こうした議論が、社会がもっと強烈で、理性的でない方法での対応を取ることを回避させたとKauranenは見ている（Kauranen 2008）。

Ridanpää（2009）は、2005年にデンマークで起こったムハンマド諷刺漫画をめぐる騒動の後にフィンランドで起こった類似の事例を、地政学的な立場から考察したものである。2006年に*Kaltio*というフィンランド北部で発行されているマイ

ナー雑誌（発行部数は 1,100 部程度）が、ムハンマド諷刺漫画をめぐる騒動をモチーフに、フィンランド政府の偽善的な態度を批判するマンガ ‘Muhammed, pelko ja sananvapaus（ムハンマド、恐怖、表現の自由）’ を描いた。マンガの中では、当時の首相らがデンマークの国旗を燃やしてイスラム世界にこびへつらう様子などが批判的に描かれていた。この作品がオンラインで発表されると、雑誌のメインスポンサーが、この作品をただちにウェブサイトから削除しなければ資金提供を取りやめるとの決定を下した。*Kaltio* の執行部は編集長にマンガを削除するように命じたが、表現の自由を理由に編集長がその決定を退けたため、編集長が解雇されることとなった。Ridanpää（2009）の関心は、デンマークとフィンランドという、直接的に政治や社会がつながっているわけではないが「北欧」という一連の社会的、文化的、政治的コンテクストとみなされやすい国家間の相互作用によって、予期しない危機が訪れるという状況に置かれている。

次に、ファンを対象とした研究を紹介する。ファン研究はフィンランド語で発表されたもの以外にはあまり発見できなかったが、フィンランドの SF ファンを研究した Hirsjärvi（2010）が日本のアニメ・マンガファンについても言及している。Hirsjärvi によれば、日本のアニメ・マンガ文化はその大部分が SF イベントや SF 雑誌を通して紹介された。最初の全国的な日本アニメのイベントである Animecon も、トゥルクの SF ファン団体によって開催された。「昔ながらのファン文化（‘old fandom’）」を構成するフィンランドの SF ファンが社会問題や科学的探究などに関心を持っていたのに対して、「アニメっ子（‘anime children’）」は身体、セクシュアリティ、体験、視覚文化に興味を持ったという（Hirsjärvi 2010）。ただしこの議論については、筆者が Animecon や他のコンベンションに関わった複数名を対象にして行ったインタビュー調査の結果と食い違うため、機会を改めて考察したい。

学術研究とは多少異なるが、マンガを使った社会運動・草の根運動に関する書籍およびウェブサイトも紹介しておきたい。それは World Comics Finland（WCF）という NGO 団体（1997 年設立）を中心とした活動で、アフリカ、アジア、中東といった地域でマンガ表現を使って自己表現する方法を教えるワークショップな

どを行っている。文章などの方法では自分の考えや意見を組み立てにくい人にとっても、マンガなら言葉だけでなく絵にも頼って主張でき、また一般化された理論などでなく自分自身の具体的な状況を語ることを通して自分の言いたいことを伝えられる、そして紙と鉛筆さえあれば表現できるのでコストもかからない、という考えの下で、識字率の高くない地域などを対象に活動を行っているようだ。そのノウハウは公式サイト上（http://www.worldcomics.fi/index.php/downloads/）でも一般公開されているが、活動事例をまとめた本に Packalén and Odoi（1999）および Packalen and Sharma（2007）がある（名字の表記はママ）。

5. おわりに

本稿は、北欧のマンガ出版状況を概観したうえで、英語で書かれたものを中心に、フィンランドで発表されたマンガに関する研究を整理した。むろん英語で書かれた学術論文・記事はフィンランドで発表されたマンガに関する研究の一部でしかなく、多くの研究がフィンランド語でのみ書かれている。しかし少なくとも英語で書かれた論考は、フィンランド国外の研究者にも参照可能な先行研究であると思われる。冒頭に述べたとおり、マンガに関する研究の国境を越えた交流を活性化するために、こうした研究が相互参照される機会が増加することを願いたい。とりわけマンガと社会の関わりに注目した先行研究は、日本社会を考察する際の比較対象として有用であるように思われる。

なお本稿は、「文化産業のグローバル展開をめぐる研究――フィンランドのマンガ出版を事例として」という研究テーマの下で書かれたものである[(3)]。本稿で整理したフィンランドのマンガ研究状況をふまえたうえで、日本のマンガの出版及び受容状況について分析結果を示していくことを今後の課題としたい。

註

（1）小田切博は同様の問題を指摘しているが、小田切によれば、日本のマンガ研究の中でも、かつては「海外のマンガ」が相当に意識されていた（小田切　2010）。

（2）タンペレ・ジャーナリズム・メディア・コミュニケーション研究所（Tampere

Research Centre for Journalism, Media and Communication）の研究員、アンナ・ランタシラ（Anna Rantasila）氏との会話による（2015 年 8 月 26 日）。

（3）本研究は JSPS 科研費 26870707 の助成を受けたものです。

文　献

※文献は読みやすさに配慮するため、日本語の文献は五十音順、日本語以外の文献はアルファベット順に並べた。

小田切博、2010、「「マンガ」という自明性――ガラパゴス島に棲む日本のマンガ言説」『国際マンガ研究』1、（2015 年 10 月 10 日取得、http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html）

株式会社 oricon ME、2015、「【年間書籍市場】コミック売上額が過去最高 2815.1 億円 前年比 104% で 2 年連続増」ORICON STYLE、（2015 年 10 月 23 日取得、http://www.oricon.co.jp/news/2047585/full/）

夏目房之介・竹内オサム編著、2009、『マンガ学入門』ミネルヴァ書房

日本新聞協会、2015、「各国別日刊紙の発行部数、発行紙数、成人人口 1000 人当たり部数」日本新聞協会公式サイト、（2015 年 10 月 23 日取得、http://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation04.html）

日本著者販促センター、2015、「書店数の推移　1999 年～2015 年」日本著者販促センター公式サイト、（2015 年 10 月 23 日取得、http://www.1book.co.jp/001166.html）

ベルント、ジャクリーヌ、2010、「序文――文化横断的コミックス研究をめざして」『国際マンガ研究』1、（2015 年 10 月 10 日取得、http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html）

Arktinen Banaani and Sarjakuvantekijät Ry（編集発行）2001, *BD@fi: Comics and Modern Technology*.

Beaty, Bart, 2008, *Unpopular Culture: Transforming the European Comic Book in the 1990s*, Toronto, Buffalo, and London: University of Toronto Press.

Bluhm, Mads, 2015, 'Denmark: The comic book situation in Denmark,' Nordicomics,（2015 年 10 月 23 日取得、http://nordicomics.info/aboutnc/denmark/）

Ekebom, Terhi, 2013, *Kummituslapsi*（The Ghost Child）, Oulu: Asema Kustannus.

Eskelinen, Johanna, 2008, 'Donald Duck Comics as a Finnish Institution,' A FAST-FIN-1（TRENAK1）Finnish Institutions Research Paper, University of Tampere,

（2015 年 10 月 23 日取得、http://www15.uta.fi/FAST/FIN/CULT/je-ankka.html）

Filppu, Katri, 2012, 'Getting the piture: intersemiotic substitutions and additions in Carl Baraks's and Don Rosa's comics translations,' Pro-gradu tutkielma, University of Helsinki.

Hakapaa, Jyrki, 2002, 'Internationalizing Book Distribution in the Early Nineteenth Century: The Origins of Finnish Bookstores,' *Book History*, 5, 39-66.

Hirsjärvi, Irma, 2010, 'Fandom, New Media, Participatory Cultures,' Ulla Carlsson (ed.), *Children and Youth in the Digital Media Culture*, Göteberg: Nordicom, University of Göteberg, 133-141.

Holländer, Tove, 1983, *Från idyll till avidyll: Tove Janssons illustrationer till muminböckerna* (*From idyll to non-idyll: An Analysis of the Illustartions in Tove Jansson's Moomin Books*), Åbo: Tryekeri Gillot Ab.

Hänninen, Ville, 2011, 'Finnish Opium,' Ville Hänninen (ed.), *Finnish Comics Annual 2011*, Helsinki: Otava Book Printing LTD, 9-17.

Hänninen, Ville, 2015, 'About Finnish comics,' Finnish Comics Info, (2015 年 10 月 23 日取得、http://finnishcomics.info/info/)

Kansallinen Mediatutkimus (KMT), 2014, 'KMT 2014: lukijamäärät ja kokonaistavoittavuudet,' Media Audit Finland, (2015 年 9 月 8 日取得、http://mediaauditfinland.fi/wp-content/uploads/2015/04/KMT_2014_lukijamaarat1.pdf)

Kataisto, Vesa, 2014, 'Fingerpori is calling you!' Pertti Jarla, *Fingerpori from Finland*, Helsinki: Arktinen Banaani, 6-7.

Kauranen, Ralf, 2008, *Seriedebatt I 1950-talets Finland: En studie I barndom, media och reglering* (The comic debate in Finland in the 1950: A study concerning childhood, the media and regulation), Åbo: Åbo Akademis förlag.

Kiasma, 1999, *Soittaisin seuraavaksi? Uusi suomalainen sarjakuva – Whom should I call next? New Finnish Comics*, Helsinki: Kiasma.

Kolehmainen, Kristiina, 2015, 'Sweden: Swedish comics now and then,' Nordicomics, (2015 年 10 月 23 日取得、http://nordicomics.info/aboutnc/sweden/)

Koponen, Maarit, 2004, 'Wordplay in Donald Duck comics and their Finnish translations,' Pro gradu thesis, Department of English, University of Helsinki

Kukkonen, Karin, 2008, 'Popular Cultural Memory: Comics, Communities and Context Knowledge,' *Nordicom Review* 29 (2), 261-273.

Lehtinen, Eija, 2008, 'Terveysaiheinen sisältö Aku Ankka sarjakuvalehdessä (Health-related content in Donald Duck comics),' master's thesis of health education, University of Jyväskylä.

Media Audit Finland, 2014, 'CIRCULATION STATISTICS 2014,' Media Audit Finland, (2015 年 9 月 8 日取得、http://mediaauditfinland.fi/wp-content/uploads/2015/05/Circulations20141.pdf)

Mikkonen, Kai, 2012, 'Focalisation in Comics: from the Specificities of the Medium to Conceptual Reformulation,' *Scandinavian Journal of Comic Art* (*SJoCA*), 1 (1), 70-95.

Mitsui, Hideko, 2012, 'Moomintroll and Finland in Japan's Social Imaginary,' *Suomen Antropologi: Journal of the Finnish Anthropological Society*, 37 (1), 5-21.

Mousse, Annina, 2015, 'The Characteristics of the Finnish Book Publishing Business,' University of Tampere, (2015 年 10 月 23 日取得、https://www15.uta.fi/FAST/FIN/RESEARCH/mousse.pdf)

Musturi, Tommi, 2009, *Samuelin Matkassa*, Helsinki: HuudaHuuda.

Nordicom, 2014, 'Number of newspapers 2013,' Nordicom 公式ホームページ (2015 年 10 月 23 日取得、http://www.nordicom.gu.se/en/media-trends/media-statistics)

Nordicomics, 2015, 'Norway,' Nordicomics, (2015 年 10 月 23 日取得、http://nordicomics.info/aboutnc/norway/)

Packalén, Leif, and Odoi, Frank, 1999, *Comics with an Attitude…: A Guide to the Use of Comics in Development*, Helsinki: Ministry for Foreign Affairs of Finland, Department for International Development Cooperation.

Packalen, Leif, and Sharma, Sharad, 2007, *Grassroots Comics: a development communication tool,* Ministry for Foreign Affairs of Finland.

Pasonen, Harto (ed.), 1997, *Sarjakuvantekijät - Cartoonists from Finland*, Helsinki: Valiosarjat.

Pörsti, Simo, 2014, 'Us Fellas Gotta Be Nice to You Ladies: Performing Gender in Garth Ennis's and Steve Dillon's *Preacher* Series,' Pro-gradu tutkielma, University of Helsinki.

Ridanpää, Juha, 2009, 'Geopolitics of Humour: The Muhammed Cartoon Crisis and the Kaltio Comic Strip Episode in Finland,' *Geopolitics*, 14 (4), 729-749.

Ronkainen, Timo (translated by Lauri Nurmi), 2010a, 'Disney Made in Finland,'

Ankkalinnen Pamaus（*The National Donaldistic Magazine*）, 7（special issue）, 3-11.

Ronkainen, Timo, 2010b, 'Publishing History of Disney Comics in Finland,' *Ankkalinnen Pamaus*（*The National Donaldistic Magazine*）, 7（special issue）, 12-16.

Statistics Finland, 2014, *Kulttuuritilasto*（*Cultural Statistics*）*2013*, Helsinki: Statistics Finland.

Tarkka, Minnna, 2003, 'Notes on Nordic Media Cultures,' Minna Tarkka and Mirjam Martevo（eds.）, *Nordic Media Culture: Actors and Practices*, Helsinki: m-cult, 13-27.